



TITLE:

イギリスU3A(The University of the Third Age)の理念と実態に関する一考察(京都大学生涯教育学講座シニアキャンパス実施記念号)

AUTHOR(S):

生津, 知子

---

CITATION:

生津, 知子. イギリスU3A(The University of the Third Age)の理念と実態に関する一考察(京都大学生涯教育学講座シニアキャンパス実施記念号). 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究 2005, 4: 91-105

ISSUE DATE:

2005-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/43858>

RIGHT:

## イギリス U3A (The University of the Third Age) の 理念と実態に関する一考察

生津 知子

Consideration on the Idea and Actual Situation of U3A  
(The University of the Third Age) in the UK

Tomoko NAMAZU

### 1 はじめに

イギリス U3A (The University of the Third Age) は、勉学、就業に続く「第三」の時期を「人生の絶頂期」(the crown of life) として捉え、それを活動の主導理念とする、高齢者の自立的・相互扶助的な学習活動である。メンバーひとりひとりが、単なる「参加者」ではなく、能動的に学習活動をつくり上げる主体と位置づけられている点で注目される。1980年代初頭から活動を展開しており、現段階では、全国540箇所に地域ごとの拠点をもち、約14万人<sup>1)</sup> (イギリスにおける60歳以上人口の約1%) のメンバーを有する。

本論は、従来の U3A 研究が、文献調査を中心とした活動理念の理解、もしくは活動メンバーの特性、活動の規模などといった実態調査のいずれか一方に偏って行われてきたのに対し、双方の観点から分析をすすめようとするものである。というのも、上述のように、学習者自身の手で学習活動が組織・運営されるイギリス U3A においては、彼らが活動をどのようなものと理解しているかという点が実際の活動展開に反映されると考えられ、その相互性に着目することこそが、U3A 活動のダイナミズムを捉える上で重要だと思われるからである。

本論で用いる研究方法は、文献調査に加え、イギリス U3A の実態を明らかにするために、2002年11月26日に行ったインターネット調査を中心としている。詳しい手続きについては第4節で述べる。

### 2 国際的動向におけるイギリス U3A — 2つのモデルの展開

国際的な U3A の活動は、1972年、フランスで Toulouse 大学の教授 Pierre Vellas によって、退職者向けのサマースクールが開かれたのを始まりとする。Vellas は、「その設備、建物、スタッフ、研修施設などを活用して、社会における高齢者の生活改善のために大学は何ができるか」<sup>2)</sup> という現実的な発想に立ち、夏季休暇中は空いている大学の施設を利用して、講義、コンサートやその他文化的な活動を企画・実行したのである。

活動の反響は、フランス国内にとどまらず、諸外国にも急速に広がった。1975年までには、ベルギー・スイス・ポーランド・イタリア・スペインなどのヨーロッパ諸国、そしてカナダ・アメリカにおいても、U3A が設立されている<sup>3)</sup>。そして同年、フランスを本部とした国際組織

としての AIUTA (Association Internationale des Universités du Troisième Age) が設置された。

このような国際的動向の中、1982年のイギリス U3A の誕生は、運動にひとつの転機をもたらす出来事であったといえる。というのも、イギリス U3A は、既存の U3A における活動の発想を明確に転換させた、新しい活動形態を生み出したからである。確かに、それ以前も、U3A の運営形態および学習方法・内容は、一定程度、各国・各地域の状況を反映して多様な様相を呈していたといえる。だが、イギリス U3A は、それまで前提とされていた大学との連携を行わず、学習者自身で活動を作り上げていこうとしたのである。

現在、国際的な運動の中では、U3A を「フランス型」と「イギリス型」という2つのモデルに大別するのが一般的となっている<sup>4)</sup>。前者の「フランス型」は、施設や教師など大学のリソースを活用することによって成り立っている。すなわち、教える人はその分野の専門家であり、「教える」側と「教えられる」側の間の区別が明確に設定されたモデルである。フランスをはじめとしたヨーロッパ諸国やフランス語圏の国々を中心に展開されている。これに対し、後者の「イギリス型」は、地域のリソースを生かしつつ、すべてが学習者自身の手で行われる。すなわち、学習者の誰もが学ぶ人であると同時に「教える人」にもなるのである。イギリスをはじめ、オーストラリアやニュージーランドで展開されている。

次節では、このような「イギリス型」を生み出したイギリス U3A の理念を、その設立を中心的に担った Peter Laslett の構想に焦点を当ててより詳細にみていきたい。

### 3 イギリス U3A の理念 — Peter Laslett の U3A 構想を中心として

本論で Laslett の U3A 構想を取り上げるのは、彼が設立者の中でも特に早くから国際的な U3A の動向に注目し<sup>5)</sup>、イギリスにおける設立活動を主導的に担った点はもちろんであるが、主に彼が次のように U3A の思想的基盤をつくり上げた点を考慮してのことである。それは、彼がイギリス社会の高齢化を見据え、U3A 活動を主導する概念である「サードエイジ」を積極的に意味付けた点、そして「イギリス型」U3A の特徴を端的に示す諸原則 ('Objects and Principles') を作成した点である。

#### (1) Laslett の「サードエイジ」概念と教育

「サードエイジ」は、U3A 活動を主導する概念である。「サードエイジ」の「エイジ」は、年齢や時代を意味するものではなく、人の一生をいくつかに分けた中の一時期とされる。その時期は、人間が教育を受け社会化される時期である「ファーストエイジ」(the First Age)、家庭や社会において責任を担う時期である「セカンドエイジ」(the Second Age) の後に続く時期とされ、依存や老衰の時期とされる「フォースエイジ」(the Fourth Age) とともに区別される。すなわち、まだアクティブに活動できる段階であるにもかかわらず、もはやフルタイムの仕事や子育てに従事しなくなった時期なのである。大多数の人が80代半ばもしくは後半まで生き続けるようになったこと、そしてその多くが健康で活発であることのために、このような「サードエイジ」の時期が誕生したとされる。

Laslett は、イギリスにおいてこのような「サードエイジ」概念をより積極的に意味付けようとした。彼は、社会における人々の価値観が労働を中心として構築されていることを問題視していたのである。彼によれば、そのような価値基準の下では、「セカンドエイジ」が最も生産的で重要な時期としてみなされる一方、労働に従事しなくなった退職後の人々は、無視されている／忘れ去られている状態である「中間状態」(limbo) や「怠惰」(indolence) の状態に位置付けられてしまっているという。このような価値観は、退職後の人々が増えつづけていく現実と明らかに矛盾するものである。

Laslett は、そのような労働や生産性という社会的・経済的観点ではなく、自分の生活をいかに自分自身の意思でコントロールできるかという個人的・人間発達の観点から、退職後の人々、ひいてはライフコース全体を捉え返すことを提案する。そうすると、実は彼らこそが最も自分自身と向き合い、自分のやりたいことをやり、自己の欲求を満たすことを可能とする状況にいる人々ということになる。彼らのほとんどは社会的な制約から解放されて自由を有しており、健康であり、さらに今までの経験から得た知やスキルを多分に有しているのである。Laslett は、そのような観点から「サードエイジ」を意味付ける。ゆえに「サードエイジ」は「自己の達成」(self-fulfillment) の時期であり、「人生の絶頂期」('a crown of life') とされるのである。

ここで、Laslett が「自己の達成」を実現するための有効な手段として注目したのが教育であった。「セカンドエイジ」の段階に職業や親としての役割と関わって獲得されていたアイデンティティや自負心といったものは、「サードエイジ」では教育によって達成されうると考えたのである<sup>6)</sup>。その際 Laslett は、教育それ自体が目的であることを強調する。「自己の達成」の時期として「サードエイジ」を捉える論理からすれば、教育によって獲得された知や習得されたスキルは個々人にとって満足感を与える根源であることこそが重要であり、それが実際に役に立つかどうかということが問題ではない。教育の成果は、競争原理を取り込んだ試験における達成からではなく、学習者の精神状態やパーソナリティの変化から明らかになるのである<sup>7)</sup>。

Laslett にとって、このような「サードエイジ」のための新しい教育形態を実現させるものが U3A であった。

## (2) 'Objects and Principles' にみる Laslett の U3A 像

Laslett の描いた U3A 像を最も具体的かつ端的に表すものとして、彼が1981年に作成した U3A の 'Objects and Principles' がある。これは、現在でも U3A の全国機関<sup>8)</sup> が希望者に無料で配布している U3A の 'Information Leaflet' (2002) に、'Original Objects'、'Original Principles' という名称で全文が掲載されているものである。各地の U3A が活動を実際に組織・運営する際のたたき台として、最も影響を与えてきたものであると考えられる。

8 項目から成る 'Objects' は、次の 2 つに大別できる。第一に、イギリス社会の高齢化の問題に対処すべく、新しい教育形態を発展させていく必要性について (第 1～3 および 6～8 項目)、第二に、新しい教育形態の具体的あり方について (第 4、5 項目) である。第二につい

ては、「教える人と学ぶ人の区別がな」いこと、「活動が自発的なものであること」、学習が「知的興味ただそれだけのために発展する」ことが示されている。

このような‘Objects’を達成するために、‘Principles’では、U3Aの具体的な活動がより詳細に言及されている。20項目から構成されるが、U3A設立のための実践的なマニュアル‘U3A DIY’<sup>9)</sup>では‘Guiding Principles’として3項目に集約されている。第1項目では、「教える人は学びもし、学ぶ人は教えもする」ことが述べられ、「教授(instruction)」活動以外での「教える」方法の具体的内容について言及されている。第2項目では、U3Aが「資格を要求し、評価を行いはしない」ことが強調され、活動メンバーによる「選択」「決定」を重視することが強調されている。第3項目においても、メンバーの「嗜好」性、「それ自体を目的として学習を強調すること」の重要性が述べられている。

以上をまとめると、LaslettのU3A構想の特徴は次の4点になろう。①イギリス社会の高齢化の問題を視野に入れた新しい教育形態として構想していること、②学習者は「学ぶ人」であると同時に「教える人」でもあること、③学習者が自身の選択・決定に基づいて活動をつくり上げること、④学びそれ自体を目的とする発想に立ち、資格・単位・試験というシステムを設定しないこと、である。これらの特徴は、前述したようなLaslettが「サードエイジ」概念をめぐる展開した議論とも合致するものであるといえる。

では、Laslettの提起したU3A像は、実際のU3A活動にどの程度具現されているのだろうか。以上の4点を念頭に置きつつ、U3Aの学習活動の実態をみていきたい。

#### 4 U3Aにおける学習活動の実態

U3Aにおいて、メンバーが自分の関心のある活動を日常的に行うためのグループは、Study Group（あるいはInterest Group）と呼ばれる。各地域のU3Aはそれぞれ、主として学習内容別に、10から100程度のStudy Groupを有している。Study Groupは、U3Aを構成する最も基本的な活動単位であるといえ（次ページ図1参照）、U3Aの活動メンバーは、メンバーとなったときから最も密接に、最も頻繁にその活動にかかわっているのである。このような点を考慮し、本論では、個々のメンバーの活動理解が最も反映されやすい場として、Study Groupに焦点を当てる。

以下、U3AにおけるStudy Groupの全体的な特性を明らかにするために、既存の成人教育機関の実態と比較対照する。イギリスには、多様な成人教育機関が存在するが、本論で取り上げるのは、The Workers' Educational Association（以下、WEA）である。WEAは、成人教育の機会を提供するチャリティ団体として、イギリスの中で最も大きな組織のひとつである。成人—特に若いときに学習する機会に恵まれなかった人々、社会的・経済的な不利益を被っている人々—に対し、質の高い学習を提供することをその目的としている。今回、その地域・全国レベルでの組織的な活動展開、学習者の自発的な活動を重視する運営方針という点を考慮し、U3Aと比較対照することとした。

WEAおよびU3Aの学習活動の実態を知る手がかりとしては、次の資料を用いる。WEAについては、2002年12月4日時点でのWEAのホームページおよびWEAの提供する各種資

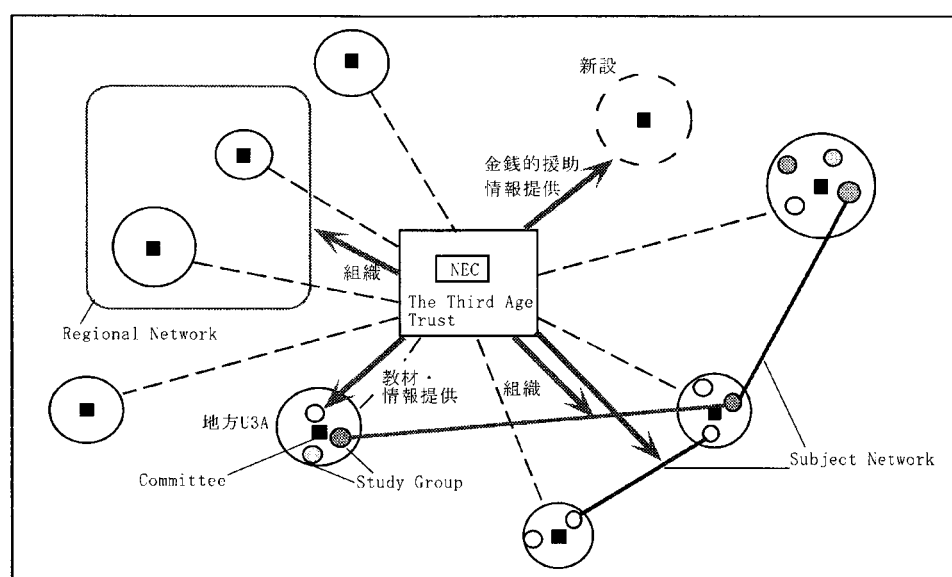


図1 イギリス U3A の組織形態

出典 全国機関の発行する 'Information Leaflet (1: Introduction to U3A, 2: Objects and Principles, 5: The Third Age Trust)' (2002)、全国機関のホームページ (2002年11月26日時点) より、筆者作成。

注 NEC (National Executive Committee): 全国機関の運営委員会。Subject Network: 各 U3A の Study Group の学習内容別全国ネットワーク。Regional Network: U3A の地域別ネットワーク。Committee: 各 U3A の運営委員会。

料<sup>10)</sup>である。U3A については、①2000年11月から2001年1月および2001年4月から8月にわたって行われた全国機関による U3A の実態調査<sup>11)</sup> (以下、「実態調査」)、②2002年11月26日時点での各 U3A のホームページ<sup>12)</sup>、③全国機関が Study Group のために提供する各種資料、④2002年6月17日から7月4日に及ぶ U3A 関係者への筆者のインタビュー調査<sup>13)</sup>の結果資料である。

以下、学習活動における対象者の規定・属性、組織の概要、学習内容、学習活動の方針という4つの側面において比較検討する。表1は、その概要を一覧にしたものである。

表1 WEA と U3A の対応表

		WEA	U3A
	設立年	1903年	1982年
規模	全国の支部数	約650	508 <sup>14)</sup>
	スタッフ数	約700人 (パートタイムの Tutor 約4,500人)	すべてメンバーによって運営されているため、「スタッフ」はいない
	学習者数/メンバー数	約13万2千人	12万2,522人 <sup>15)</sup>
対象者規定	対象者の規定	ターゲットを絞る場合と絞らない場合がある	フルタイムの仕事を終えた人が主流

対象者属性	平均年齢	約53歳	約70.6歳
	男女比	確認できず	約3 : 7
	人種・民族	ターゲットとして設定される場合がある	白人約96%
組織概要	学習活動の期間	短期（1～3ヶ月程度）が主流	・長期（1年程度）が主流 ・特に設定していない場合もある
	学習活動の頻度	週1回が主流	月1回の割合が高い
	日時の設定	多様	ほとんどが平日の日中
	学習活動の場	学校・大学・コミュニティセンターなど	個人の自宅で行うことが多い
	各コース／グループにおける学習者数	・20名前後が主流	・10名前後が主流 ・小規模に保つことを重視
	学習活動の費用	1コースにつき10～70ポンドが主流	教材やお茶代など必要最低限
学習内容	上位3項目	①「美術」 ②「社会・歴史」 ③「文学・哲学」	①「語学」 ②「文学・哲学」 ③「美術」
	特徴的な活動	・基礎教育 ・英語を母語としない人に対する英語教育 ・学習障害の克服	・「ゲーム」 ・「ウォーキング」 ・「ランチ・集い」
学習活動方針	資格・学位・単位の付与の有無	行う場合もある（全体の約20%）	行わない
	「教える人」の位置付け	Tutor には専門性が要求され、学習者と明確に区別される	メンバーの中から Group Leader を決める
	コース／グループの運営形態	学習者（Student）の意向を反映しつつも Tutor 主導	Group Leader がどのような役割を果たすかによって異なる

出典 筆者作成。

#### (1) 対象者の規定・属性

WEA の学習活動は、3種類のプログラムから成っている。General Programme（全体の約50%）、Community Learning（約40%）、Workplace Learning（約10%）である。General Programme は、あらゆる成人に開かれ、多様な学習内容を提供する、一般的な成人教育機会としてのプログラムである。Community Learning は、社会的に不利益を被ってき

た特定の人々を対象とし、学習機会を提供するプログラムである。Workplace Learning は、労働者——特に低所得者の学習ニーズに見合う学習機会を提供するプログラムである。よって、これら3種類のプログラムにおいては、自ずと構成される学習者の属性は異なってくるといえる。本調査では正確な数字を確認することはできなかったが、各プログラムにおける運営方針を見る限り、Community Learning では、多様な人種・民族、労働者階級の人々の割合が高く、Workplace Learning では、より若い年齢層の人々の割合が高くなっていると考えられる。なお、2000年から2001年にかけての、プログラム全体における学習者の平均年齢は、約53歳であった。

これに対し、U3A による対象の規定は、筆者のホームページ調査によると、次の3パターンがあった。多いものから挙げると、①「サードエイジの人」「退職した人」という表現を用いて規定している場合、②「50歳以上」「55歳以上」との年齢制限を明記して規定している場合、③「仕事に従事していない」ということを対象の主な基準として、年齢の下限を定めていない場合、である。

①は、「退職した人」として対象を規定している場合が大半を占める。そうでない場合は、「仕事を終えたあとの人生」「退職と自由のとき」という定義を付した上で「サードエイジ」という言葉を用い、規定している<sup>16)</sup>。②は、年齢への言及のみにとどまらず、「退職した50歳以上の人々」というように、①との組み合わせで対象を規定している場合が大半である。また、基準とされる年齢は、「50歳以上」が最も多い。③は、ホームページ調査では、1つのU3A のみにとどまっていたが、①②のように、ある一定の年齢や、新たなライフイベントを基準として対象を規定しているわけではないため、より若い年齢層の人々も活動の対象者とされている。

このように、U3A における対象者の規定では、全体として仕事の有無が大きな基準となっているといえる<sup>17)</sup>。また、U3A 活動の主体者を指す「サードエイジ」という言葉の意味をどのように捉えているかによって違いが生じていることも考えられる。

次に、U3A における構成メンバーの属性をみる。「実態調査」によると、平均年齢は約70.6歳（男性約70.3歳、女性約71.5歳）である。2001年のイギリスの平均寿命が男性約75歳、女性約80歳であることを考慮しても、比較的高い年齢層の人々によって構成されていることが分かる。男女の比率は、サンプル数3034人のうち、男性779人（約26%）、女性2,251人（約74%）で約7割以上を女性が占めている。人種は、2,914人が白人であり、全体の約96%という圧倒的多数を占めている。さらに、最終職種は、専門職が1,202人（約40%）、事務職が558人（約18%）、経営職が449人（約15%）、管理職が440人（約15%）と上位を席卷している。

以上、WEA と比べると、U3A の構成メンバーは、年齢、人種・民族から経歴に至るまで、類似性の高い人々が集う傾向が高いといえる。この理由としては、U3A が対象者を自らの活動に取り込むための働きかけを特に行っていないという点が考えられる。



## (2) 組織の概要

### ① 学習活動の期間

WEA における学習コースの実施期間は、その内容別に多様に設定されている<sup>18)</sup>。だが管見の限りでは、1ヶ月から3ヶ月程度が主流であるといえる。これに対し、U3A の Study Group の活動期間は、その内容にかかわらず、各々の U3A において一律である。筆者のホームページ調査では、活動期間を1年に設定する U3A が最も多かった。また、学習活動の実施期間を特に明示していない U3A も目立った。

### ② 学習活動の頻度

WEA の学習活動は、ほとんどが週に1回定期的に行われている。これに対し U3A では、よりゆっくりとしたペースで活動が行われている場合が多いといえる<sup>19)</sup>。特に、月に1回という頻度で行われている活動の割合が高いことは注目すべき点である。たとえば Bath U3A の場合、全98の Study Group のうち、活動頻度が月に1回であるのが40グループと最も高い割合である。Bath U3A のメンバーである Audrey Cloet は、月1回程度のペースで活動を行うことの意義をこう述べる。「もしカレッジに行っていたら、それ（詩の学習－筆者）は10週間で終わってしまうのです。毎週の活動でね。たった10週間です。これだと、残りの人生で何をやったらいいのかわからない。詩を学ぶ場合だと、月に一度で十分です。そっちのほうがずっといい。永遠に続けることができますからね」<sup>20)</sup>。他では実現し難いゆるやかな活動のペースが U3A のひとつの魅力となっているようである。

また、U3A において一人で複数の Study Group に参加している人の割合が高いのは、このような活動頻度とある程度関係していると思われる。「実態調査」によると、調査日より過去12ヶ月の間に2つ以上の Study Group に関わっている人は全体の約65%であり、5つ以上の人も全体の約11%にのぼる。筆者のインタビュー対象者に関しても、たとえば Roger Cloet (Bath U3A) は、「コンピュータ」(月3回)、「科学」(月1回)、「ヨーロッパ研究」(月2回)の3つの Study Group を掛け持ちしている。Cloet は、それぞれ「学びたいペースで学べるのが魅力」だと述べている<sup>21)</sup>。

### ③ 日時の設定

WEA における学習活動の日時は、多様に設定されている。平日の昼夜のみならず、土日にも設定されている。これに対し、ほとんどの U3A における学習活動が平日の日中に行われているのは特徴的である<sup>22)</sup>。この理由について Audrey Cloet (Bath U3A) や Barbara Megson (Cambridge U3A) は、「高齢者はあまり夜間に外出するのを好まないから」<sup>23)</sup>だと述べる。メンバーにとって都合のいい日時を選択した結果、「平日の日中」における活動が主流になったと考えられる。また、筆者のインタビュー調査においては特に言及されていなかったが、メンバーがフルタイムの仕事を抱えていないことの影響も大きいと思われる。

#### ④ 学習活動の場

WEA の学習活動は、地域の学校や大学、およびコミュニティーセンターなどの施設を中心に展開されている。これに対し U3A では、コミュニティーセンターなどの施設に加え、「メンバーの自宅」が中心的な活動の場となっている。ホームページ調査では、そのことを自身の特性としてアピールする U3A も少なくなかった。

主として、文学、社会・歴史、美術、語学分野の Study Group では、メンバーの自宅が活動の拠点となる場合が多い。しかし、活動内容によっては個人の自宅で行うことに限界があり、それに適した場を探さねばならないようである。たとえば BathU3A の場合、コンピュータを扱う学習活動は、その設備を整えた地域の学校のコンピュータ室で行われている<sup>24)</sup>。

#### ⑤ 各コース／グループにおける学習者数

WEA、U3A とともに各コース／グループにおける学習者数を正確に把握することは困難であるが、全体として WEA の方がその数は若干多いといえる。たとえば、WEA の Liverpool 支部では、1999年から2000年の間に、ひとつの学習コースに平均17人の学習者が参加したことが報告されている。また、‘Annual Review’ (2000-2001) では、28人 (the Isle of Wight)、24人 (the South Eastern District)、41人 (Suffolk) が各々の地域史の学習コースに参加したという報告もある。これに対し U3A では、管見の限り、10人前後のグループが主流であるといえる。さらに、U3A では、Study Group が大きくなりすぎないように配慮する傾向がある。たとえば、参加者が一定以上の人数に達した場合、可能であれば同様の学習活動を行う、別の独立した Study Group が組織される。また、それができない場合は、メンバーが「順番待ち」の状態に置かれることが多い。「実態調査」によると、U3A において「順番待ち」をしている人は143人 (約5%) であった。このように U3A では、Study Group を小規模に保つこと、すなわちインフォーマルな雰囲気が重視されているといえる。

#### ⑥ 学習活動の費用

WEA における学習コースの費用は、その期間、目的、内容によって大きく異なる。無料で提供されるコースもあるが、管見の限り、1コースにつき10ポンドから70ポンド程度が主流である<sup>25)</sup>。これに対し U3A では、個々の Study Group に参加するための費用は特別に設定されていない場合が多い<sup>26)</sup>。教材やお茶代 (Bath U3A の場合、30ペンスから50ペンス) など最低限の経費だけが要求されている。U3A がこのような費用設定を実現しうるのは、「教える」という役割も含めて Study Group の運営がすべてメンバー自身によって担われているためだといえる。

#### (3) 学習内容<sup>27)</sup>

筆者は、全国機関による学習内容の分類を参考として、WEA、U3A における学習内容を18項目<sup>29)</sup>に分類、集計した。多いものから挙げると、WEA においては、6,291の学習コースのうち、「美術」が1,183コース (約19%)、「社会・歴史」が923コース (約15%)、「文学・哲

学」が789コース（約13%）と高い割合を示している。U3A では、筆者のホームページ調査において、1,728の Study Group を確認できたが、そのうち「語学」が235グループ（約14%）、「文学・哲学」が197グループ（約11%）、「美術」が175グループ（約10%）と多数を占めている。

WEA では提供されているが、U3A においては確認することの出来なかった学習活動は、次の2つに大別できる。一つ目は、生活上必要な基本的スキルを習得するため、また生活上の困難を克服するための学習活動である。たとえば、識字や計算能力などの基礎教育、および英語を母国語としない人々に対する英語教育、そして学習障害（Learning Difficulties）を克服するための学習活動などを挙げることが出来る。二つ目は、より高度な教育を受けるため、仕事を得るための学習活動である。たとえば、資格取得を目指して経営やマーケティングを学ぶことなどが挙げられる。

逆に、U3A において比率が高い学習活動としては、「ウォーキング」を指摘できる。筆者のホームページ調査においては、109（約6%）グループを確認できた。WEA における同コースの割合が約0.3%であるのに対し、高い割合であるといえる。「ウォーキング」は、U3A における代表的な活動のひとつであり、ほとんどの U3A がそのグループを有しているといわれている<sup>30)</sup>。筆者のホームページ調査においても、活動内容を掲載していた68の U3A のうち、63の U3A で「ウォーキング」が挙げられていた。このように「ウォーキング」の人気があるのは、Roger Cloet (Bath U3A) によると、それが「ただ歩く以上の意味をもっている」<sup>31)</sup> からだという。U3A における「ウォーキング」は、歩くことで健康を保つというだけではなく、話をしながら歩くことでメンバー同士の親交を深めたり、また地域の自然を満喫したりする活動として重視されているようである。

また、U3A 特有の Study Group の活動として、「ランチ・集い」を挙げることができる。「ランチ・集い」とは、食事をとったりコーヒーや紅茶を飲んだりしながら、それぞれが興味を持っていること、また最近の出来事等について話をする活動である。ホームページ調査において、Study Group の活動として「ランチ・集い」を挙げていた U3A は、68のうち34であったが、その他の U3A においても、メンバー全員を対象としたイベントとして同様の機会が設けられていた。Audrey Cloet (Bath U3A) によると、このような活動は、同じ興味・関心を持った「仲間づくり」のための機会として非常に重要であるという。それは、U3A の果たす主要な役割のひとつとして位置付けられているのである<sup>32)</sup>。

以上、WEA と比較すると、U3A の学習活動では、活動の結果として何らかのスキルが習得されることよりむしろ、メンバーが集って何かを行うという活動のプロセス自体に意義が見出される傾向が強いといえる。

#### (4) 学習活動の方針

##### ① 資格・学位・単位の付与の有無

WEA において資格付与の行われるコースは全体の約20%である<sup>33)</sup>。資格付与を行う目的は、特定の科目について一定のスキルを身に付けたいという学習者のニーズを満たすためだとされ

る。他方、U3A では、「学習の達成をはかることはしない」こと、「いかなる形態の資格や単位も付与しない」ことが学習活動の基本方針として明確に掲げられている<sup>34)</sup>。これについて Roger Cloet (Bath U3A) は、U3A が「学ぶこと自体の楽しみ」を追求しているためだと述べる。資格付与を行うと、知識を増やすことだけが学習の目的になってしまうのだという<sup>35)</sup>。

## ② 「教える人」の位置付けとコース／グループの運営形態

WEA において学習者 (student) は、コースの運営に関わる権利を有している。具体的には、Tutor とともに、何をどのように学ぶかについての詳細を決定する権利である。また、コースの間も随時それを修正し、発展させる作業に関わっていく<sup>36)</sup>。だが、彼らの立場は、Tutor のそれと明確に区別されている。Tutor と学習者が共同で学習場面を作り上げていくというプロセスは、Tutor の専門性が確立されているために成り立っているのである。Tutor は、「正式な資格を持っている、かつ／もしくは経験を重ねてきた」<sup>37)</sup> という一定の条件を満たしていることによって WEA に雇われている人々である。彼らには、教授内容の専門性にとどまらず、学習者の要求を十分に引き出し、コース全体を効果的に運営していくためのスキルが要求されているのである。

他方、U3A では、Study Group の運営を中心的に担う人を、Group Leader と呼ぶことが多い<sup>38)</sup>。WEA と大きく異なる点は、彼らが「学ぶ人」でもあるメンバー自身であり、彼らが「教える人」となるための基準が明確に設定されていない点である。

ゆえに、Group Leader に期待される役割は各 U3A によって異なる<sup>39)</sup>。Len Street (Lea Valley U3A) によると、彼らの位置付けによって、U3A における Study Group の運営形態は次の 4 つに大別されるという<sup>40)</sup>。それは、Group Leader が、①Tutor として位置付けられる場合、②Convenor として位置付けられる場合、③Organiser として位置付けられる場合、そして④明確な Group Leader が存在しない場合、である。以下、より詳細に見ていきたい。

①は、Group Leader が、「教える」ことに関してある程度の専門性を有している人 (Tutor) としてグループを主導する場合である。この Tutor の立場は、WEA における Tutor のように学習者 (U3A の場合、Tutor 以外のメンバー) の立場と明確に区別されているわけではない。ゆえに、場所の確保や必要な資料のコピーなど、グループ運営の事務的な部分は、ほかのメンバーが補佐することが望ましいとされる。

②は、Group Leader が、メンバー間の話し合いを取りまとめる人 (Convenor) として、メンバーによる学習活動の計画作業を促進する場合である。学習の進め方に関して Tutor にある程度依存している①と異なり、メンバーは、より積極的に学習活動の企画にかかわる。また、活動の運営に関しても、必ずしも Group Leader によって主導されるわけではなく、メンバー各々に役割が分担される場合が多い。

③は、Group Leader が、学習活動を計画する人 (Organiser) として、メンバーの興味・関心を反映させた学習プログラムを作成する場合である。実際の活動場面では、②と同様に、必ずしも Group Leader によって主導されるわけではない。メンバーの同意が得られれば、講演者を招いたり、グループのメンバーに講演者になってもらったりすることも可能である。

④は、①②③のような形でグループを主導する Group Leader が存在せず、メンバーがお互

いに助け合う中で学習を進めていく場合である。メンバーは、「学びたい」という意欲だけでグループを組織するのである。彼らは、全国機関を介して、他の U3A において同様の学習活動を組織しているメンバーを紹介してもらい、どのように学習を進めていけばよいか、どのような本を用いればよいかなどのより具体的かつ詳細な情報を得ることができる。また、全国機関の発行するパンフレットや会報などを利用して、全国の U3A メンバーの経験を参考にすることも可能である。

本調査では、以上①～④がそれぞれどの程度の割合を占めるものかを明らかにすることはできなかったが、近年、Group Leader の不足が U3A 全体の大きな課題となっていることは指摘しておきたい<sup>41)</sup>。事態を深刻に捉えた全国機関は、Group Leader をサポートするための委員会 (The Group Leader Support Group) の名称を U3A Learning Support Group に変更している。Group Leader ひとりに Study Group の運営を期待するのではなく、それがメンバー全員によって分かち合われることを目指してのことである<sup>42)</sup>。

このように、学習活動の運営形態に関して、WEA が一定の水準を満たした Tutor の存在を確立させていたのに対し、U3A は Group Leader に明確な基準を設定していない。そのため、Group Leader の位置づけや役割も各地域の U3A で多様な様相を呈しているといえる。

## 5 考察 ― 学習活動における Laslett 構想の影響力

以下、筆者が本調査で接した U3A の学習活動の全体的な特性を、第 3 節で言及した Laslett の U3A 構想 (以下、Laslett 構想) と照らし合わせて考察していく。

まず、Laslett 構想の①イギリス社会の高齢化の問題を視野に入れた新しい教育形態として構想していること、に関しては、本調査では特別にかかわりを持った事例を見出すことはできなかった。調査全体の印象としては、実際の学習場面においてはほとんど意識されていない問題であったように思われる。しかし仮説的に、U3A の活動が結果として、社会に新たな高齢者観をもたらし、その教育形態の可能性を広げつつあることは考えられうる。このことは U3A 自体、「サードエイジ」による「サードエイジ」のための学習活動として、確実にメンバーの輪を広げてきていることから考えられる。これについてより詳細な検討は、今後の課題としたい。

次に、②学習者は「学ぶ人」であると同時に「教える人」でもあること、に関しては、実際の学習活動全体として、「教える人」がメンバーでもある点は徹底されていた。しかし、学習活動の運営形態をみると、Group Leader の不足が問題となっており、「教える」行為を担うのが一部のメンバーに限定される傾向があると考えられる。

③学習者が自身の選択・決定に基づいて活動をつくり上げること、に関しては、実際の学習活動全体として、メンバーのみによって活動が運営される点は徹底されていた<sup>43)</sup>。筆者が調査の中で受けた印象として、U3A メンバーは、すべて「サードエイジ」である自分たちで活動を行っている／きたことに関してある程度の自負心を持っているようである。だが、本調査では、学習活動の運営において、メンバーひとりひとりの選択・決定がどの程度活動に反映されているのかを明確に把握することはできなかった。ただ、この点に関しては全体として、

Group Leader の不足が問題になっていることから、自分の意見を生かして活動をつくりあげるといふレベルの能動性を、必ずしもすべてのメンバーが自覚し、発揮しているわけではないと推測される。詳しい検討は今後の課題としたい。

最後に、④学びそれ自体を目的とする発想に立ち、資格・単位・試験というシステムを設定しないこと、に関しては、実際の学習活動全体として、資格・単位を付与しないこと、試験を行わないことは徹底されていた。しかし、学び自体に意義が見出される理由として、メンバー個々人の主体性に加え、メンバー間の相互性を重視している点は、Laslett 構想と異なる点として特筆される。U3A において特徴的に展開されている学習内容が、「仲間づくり」などに有効な活動である点はこのことを裏付けるものである。たとえば、「ウォーキング」は、歩きながらメンバー同士の交流を深める機能を果たしていた。「ランチ・集い」ではさらに、そのような相互性自体が活動の目的となって展開されていた。

では、以上の比較結果をまとめてみたい。まず、学習活動全体として Laslett 構想と一致している部分である。「教える人」もメンバーである点 (Laslett 構想の②)、学習活動がメンバーによってのみ運営されている点 (同③)、資格・単位を付与しない点、試験を行わない点 (同④) が挙げられる。これらは、Laslett 構想で提起されていたことと合致しており、明らかにその影響を受けた部分であるといえる。また、これらの点がすべての U3A において徹底されていることは、それがすべての U3A において学習活動をつくり上げる際の基盤となっていることを示しているといえる。すなわち、Laslett 構想におけるこれらの点は、U3A の学習活動の特徴付ける最たるものとしてメンバーに理解され、活動に反映されていると考えられる。

次に、Laslett 構想と違いがみられる部分である。Laslett 構想の②に関しては、メンバーの誰もが「教える」ことが提起されていたのに対し、「教える」行為を担うのが一部のメンバーに限定される傾向があった。③に関しては、メンバーすべての選択・決定に基づいて活動がつくり上げられることが提起されていたのに対し、必ずしもすべてのメンバーがそのような能動性を発揮しているわけではないことが推測された。④に関しては、活動への主体的な関わりに加え、メンバー間の交流を促進する活動のプロセスが重視され、それを実現する活動が活発に展開されていた。

以上をみると、Laslett 構想と一致する部分は、U3A の学習活動全体の特性として、WEA のようなほかの学習組織との違いを生じさせているといえる。他方、異なる部分は、あくまでも全体的な傾向性として異なることを示すものであるため、各地域の U3A 間で違いがあるもののだといえる。この違いには、各 U3A を構成するメンバーの、Laslett 構想に対する認識の差が影響を与えていると考えられるが、この点に関しては現在、U3A メンバーに対する E メール調査を展開中である。調査結果に基づいた検討を今後の課題としたい。また本論では、学習活動の特性のうち「対象者の規定・属性」、「組織の概要」については、Laslett 構想と関わらせて十分に検討することができなかった。この点に関しても、Laslett 構想のさらなる分析とともに今後の課題である。

- 1) イギリス U3A の全国機関のホームページ (<http://www.u3a.org.uk/>) より。
- 2) Sheffield, M., *Third age-Second youth, The University of the Third Age*, BBC Open University Production Centre, 1984, p. 4.
- 3) Swindell, R., and Thompson, J., International Perspective on the U3A, *Educational Gerontology*, 21,1995, pp. 431-432.
- 4) Swindell, R., and Thompson, J., 前掲論文, pp. 429-447.
- 5) Laslett は、1977年には既に、イギリス社会の高齢化に関する論文 'In an Ageing World' (New Society, 27) の中で、高齢者に教育機会を提供する建設的な試みとしてフランス U3A に言及している。
- 6) Laslett, P., 前掲書, pp. 171-172 (第二版, pp. 218-220)。
- 7) 同前, p. 172 (第二版, p. 220)。
- 8) The Third Age Trust と呼ばれ、各 U3A の活動を活性化させる媒体としての役割を果たす。
- 9) 1982年から再版を重ねていたが現在は発行されていない。本論で参照したのは1982年の初版。
- 10) WEA のホームページ <http://www.wea.org.uk>。各種資料は、'Annual Report 2002'、'WEA/U3A Joint Paper' (2002) など。
- 11) 同調査は、教育技能省 (Department for Education and Skills: DfES) の助成を受け、100の U3A、3,034人の U3A メンバーからの回答を得た実態調査である。
- 12) 管見の限りでは、2002年11月26日時点で、全国で508あった U3A のうち、71の U3A が自身のホームページを開設していた。ホームページの形式や掲載されている内容は多様であり、その実態を一律に捉えることは困難であるが、それでもなお、十分な実態調査が行われてきたとは言い難い U3A において、全国的な傾向性を把握する有効な手がかりになると思われる。
- 13) 本論で参照するインタビュー記録は、イギリス U3A の全国的な運動に寄与してきた、Audrey Cloet (Bath U3A), Roger Cloet (同), Keith Richards (North London U3A), Jean Thompson (Reading U3A), Barbara Megson (Cambridge U3A) の 5 名を対象としたものである。
- 14) 2004年7月15日時点で、イギリスにおける U3A 数は540となっている (全国機関のホームページより)。
- 15) 2004年7月15日時点で、イギリスにおける活動メンバー数は141,514人となっている (全国機関のホームページより)。
- 16) 「仕事人生から退職した、もしくは半ば退職した人 (semi-retired) で、すべての年齢の人」と年齢に関する制限を設けていない一方で、「一般に50代半ばから」という但し書きを付してしている U3A もある。また、「ファーストエイジ」や「セカンドエイジ」について、それぞれ「子ども時代 (childhood)」、「フルタイムで仕事をするとき」として言及した後で、「サードエイジ」を「クリエイティブな活動と達成のとき」として強調している U3A も多い。
- 17) 「セカンドエイジ」との違いを明確に押し出すかたちでの言及が目立った。
- 18) 管見の限り、1日のみのコースから、14ヶ月のコースまでがあった。
- 19) 学習内容別に見ると、特に語学では、週に1回のペースで活動が行われる場合が多いが、その他の分野では WEA よりゆるやかなペースであるといえる。
- 20) 生津知子「イギリス U3A (The University of the Third Age) 関係者へのインタビュー記録」(未公開) p. 25。
- 21) 同前, p. 15, p. 25。
- 22) 筆者のホームページ調査においても、自身の U3A における学習活動について「日中に行うもの」と明記する U3A も9つあった。
- 23) 同前, p. 25, pp. 53-55。
- 24) 同前, pp. 17-18。
- 25) 無料のコースとしては、1日のみのコースや WEA のスタッフ養成コース、Community Learning のプログラムにおけるコースなどが挙げられる。他方、本格的なスキルを身に付けるためのコースでは、多額の費用が必要である。たとえば、14ヶ月のカウンセリング養成コース (Devon) でのコース費用は、

生津：イギリス U3A (The University of the Third Age) の理念と実態に関する一考察

924ポンドである。

- 26) メンバーに要求されるのは、U3A メンバーであるための年会費である。12ポンドから20ポンドが主流とされる (The Third Age Trust, *Introduction to U3A*, The Third Age Trust, 2002)。
- 27) 筆者のホームページ調査によると、ホームページにおいて Study Group の活動内容を掲載している U3A の数は、71のサンプル中、68であった。Study Group の活動内容は、U3A に関する基本的な情報のひとつとして認識されているといえる。
- 28) 学習内容別の全国ネットワーク、‘Start-Up Leaflet’、会報 ‘Source’ における分類を参考にした。
- 29) 「文学・哲学」、「語学」、「社会・歴史」、「ディスカッション」、「美術」、「音楽」、「科学」、「コンピュータ」、「バードウォッチング」、「ガーデニング」、「ゲーム」、「スポーツ」、「ウォーキング」、「旅行・外出」、「映画・演劇」、「ランチ・集い」、「裁縫・編み物」、「写真・ビデオ」。
- 30) 生津、前掲報告書、p. 30。
- 31) 同前、pp. 27-28。
- 32) 同前、p. 39。
- 33) WEA, *WEA/U3A Joint Paper*, WEA, 2002。
- 34) また、ホームページ上でこの点を明記している U3A 数も、71のサンプル中、28にのぼっている。
- 35) 生津、前掲報告書、p. 26。
- 36) WEA, *What the WEA Stands for*, WEA, 2001, p. 4。
- 37) WEA, *WEA/U3A Joint Paper*, WEA, 2002。
- 38) 筆者のホームページ調査では、そのような人々の位置付けを確認できた39の U3A のうち、28の U3A が Group Leader という呼称を用いていた。その他には、Co-ordinator (サンプル39中10)、Tutor (同6)、Convenor (同4)、Organisor (同2)、Animator (同1) という呼称も用いられている。ただし、これらの異なる呼称は、必ずしも役割の異なる人々を指しているわけではない。逆に、同じ呼称が用いられている場合でも、各 U3A において果たす役割が異なっていることもある。
- 39) メンバー間の連絡調整、日程および活動場所の調整という事務的な役割に徹する人として「教える」役割を担う人と区別する U3A もある。
- 40) The Third Age Trust, *Start-Up Leaflet : U3A Voices*, The Third Age Trust, 2001, pp. 3-4。
- 41) The Third Age Trust, *Sources*, No. 6など。
- 42) The Third Age Trust, *Sources*, No. 16, 2002。
- 43) だが、第三章でみたように、メンバーの規定は各々の U3A によって異なっていた。これは、各々の U3A において「サードエイジ」がどのように定義されているかによるものだと考えられる。より詳細な検討は今後の課題としたい。